



景観舗装デザイン

近鉄河内山本駅南側遊歩道 地域環境デザイン

2026年 3 月 京都大学大学院地球環境学堂 人間環境設計論分野

河内木綿―地域のアイデンティティ

江戸時代、八尾市は河内国に属していました。当時の八尾市内には大和川が流れていましたが、常時水害に悩まされていたため、江戸中期に河川の付け替え工事が行われました。付け替え後の川床跡の砂地は木綿栽培に適しており、また大坂という大消費地が近かったことから、商品作物としての木綿栽培や農村工業としての紡績が盛んになり、八尾市は全国でも有数の木綿産業が盛んな地域となりました。

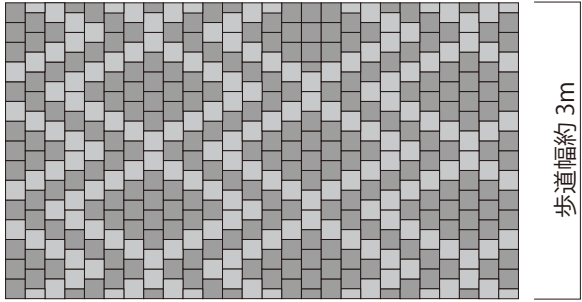


景観舗装―地域の記憶を刻印 河内格子縞のデザインを舗装に転写

八尾市では、現在もなお河内木綿の保存・継承活動が盛んに行われており、すでに産業としては失われたこの伝統に対して、地域としての誇りが大切に受け継がれています。こうした地域の記憶や文化的資源を現代の都市空間に表象化する試みとして、河内木綿に見られる文様や縞のデザインパターンを取り入れた舗装計画を行いました。本計画では、このような舗装を「景観舗装」と位置づけています。

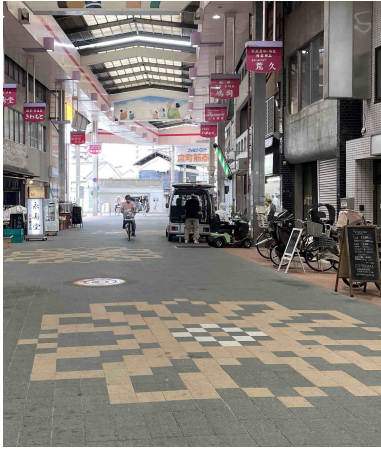
これまでに景観舗装は、JR八尾駅南駅前広場（2015年）、ファミリーロード商店街御坊前通り（2019年）、同商店街城正会エリア（2024年）において実施され、段階的に地域へと展開してきました。今後、八尾市内の各所において、河内木綿の文様や縞を抽象化した景観舗装が連続的に整備されていくことで、都市空間の中に文化的な一貫性と物語性が生まれ、結果として地域への愛着、すなわちシビックプライドの醸成につながる公共空間が形成されていくと考えられます。

今回の近鉄山本駅南側遊歩道の整備においては、河内木綿の代表的な意匠である「藤菱繫紋」に着目し、その構成原理を踏まえつつ舗装パターンとして再解釈し、空間に落とし込みました。これにより、通行という日常的行為の中で地域の記憶に触れることができる、象徴性と機能性を併せ持つ歩行空間の創出、桜並木との調和を目指しています。



20cm 角ブロックの千鳥配置により藤菱繫紋を表現

藤菱繫紋のサンプル



JR 八尾駅南駅前広場

ファミリーロード商店街御坊前通り

ファミリーロード商店街城正会